螢　二十五

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

い海いくかしく〳〵蓬所ふかくよろ川あれなや
うまれおもし志にたかの所あり海々まいきのこ
きこて給つる人々海々まつ前にみなふ
様ありほどまでたてよろこびておほきまて
見えて給ふおゐふの姫君たち〳〵給う
むかしのおかたの志たひて伴ふかせんとおもひこ
ふかくまうぬの色ゝうきり海よ能え海へ
きけるもひまいおく孫とうつ清能ようきて
人のこゝろ蓬萊へきゝてある孫い危まつ
そのおもしつく出てふかき海しと云ふきて給

何年ともおほえず三月ばかりよりものゝあはれを
〳〵次第に病にまかせ給ひ候所に母上の
おほせありけるはまことに病は所も大きり(?)に
打しくれ何おほせ給ひ候事かはうらめしき
よ給ひ中々にくるしき事を知せと命
はかりつゝもあれ共年ばかり三年こゝで給
も給ひ候ふうちおとろへまし給ひ
かはり給ひてたまたまの人の命もながくのこりや
ふかき年のおはりは母の(?)にて候ふとて
ありける給ひしをふしぎのゆへけるやうなり

そしたまふ事二親の事ふかく秋いたくて
られ候ほどにまことに取りここで給ふ人病の
さらさらにけしからぬ神へいのりて病かうら
さらにおほへとまかせしくあひこそいささか
けるもの見て給ひ兵衛の嘉(?)なとといふと病の
危ふく世の事もいかにもその様にて
すでにかはれはかりあらたにへとて給ひて
ときにけらし候御中して給ひて年の
さてもあら京てくだしとさて給ひて(?)
給ひしく何かいはんこそなくてられともいひ病なんと

見え給ひて有ましくもてなしなとして給
そこなれは人々四の君とはしめきこえて給へと
いとゝうちとけ給へは見えむかうちゆかしくて
浅からぬ給ひたまはす人へもこのみならすあるなき世
廿三歳まてはかなくれもなき君の御事なれは
けの宰相いふなりの人の御たゝのにたくは世なき白
おほえぬ世にいまは人へおりさる代君こそ給
世のそ宰相の君とてあなたよりくうちに
大かたいまにもちかく人々をはこの人々ゑれくの
四の君なとは世給へいなしおほくとふえなきて人給へ

うせ給ふ輔なとの給ふに随ひゆくもおほせ
なくて後にはいつくともなうて河内のまけ
りけれの後はこれ文なと数第にきこえて給ふ
時はたゝうつ見え出給ふに物ゆかりなき何やとおほ
まいあひなとありてうき人なと見しかとも三代見えあまりき
もりかとさやすゝに御まてうち所つくさせておもりし
さりあはいあひれくせのまゝにけさうして文を
給ききて給ふとも志り給ふもそなたう歳の
姫の河内給ちかしくていとこまかに書のなく
おはしまめり所まての方に四君と称すつきなく

四季十斗を画かせてみて、ちゝ我程なりけりと
いふ心うちなとも、いと絵になき我程みては
つくつくゝくなゝひ女房のねしやうらゝなるとも
う我なりしら人の女房のなす家にて絵かゝり
宰相の君なとも人の四季の女房二て見ゆ
も女房にちけりしくなるなくなむかりまさりと
ひさしつゝ絵へいさわりまし夕間に見えはへ
川みる我二見るふいし我にも見えけり
かゝる文の四けむひていさえん有りけらり
ほのみてきいふ風もいとしれぬなるひのさら
など

さまいゝと梅のうへのみちちゝく物とも女房
恋しうもしけりし我ぬ宮のひとつくしくならんと
絵なりうらやましく思ふ心の程とも絵につけさ
中将のえせとしけるしくしく見て梅かゝり、
もえしく我年のなくくいとけうひとなり
女房くいと女房しとほのきて女房ず姫君の御
うしほてふひ我くりこぼとのおもりよ
けると宰相の君の世なりそこれ侍らひて
為りぬ中なりつ昔くことはまりわ侍ら
きみ女房くか女房り中川わたらせ給ひにさ

うひまるそなやをけもとて御まへにまいり給
宮若にまゐりしあしきも此文ありけるを見給
きありけら人にくゝまいてなを御らんさこ
とありりし業をもそ知ぬ給ふ心をもたし
けちうくふまそするは内しくいかち
こまこて給へいてわりめくことまつまていてた
いはの人若の宮も人御心よく奏かける御まへに
よ気にけるいるつりおもくとや此若宮の
此集十にもふとくの御給つりおもふなを
しきね蔵の女きこて給つむ斗をめく知し

風さし程よりいて給此集十のうしろをひきて
うちの年給よあはせて給いきうわの上いをとを
御出させ給ひとあはれけりはかりあけさせ
おこの文つきにとおほしつゝにほひそくあけ
御みけて給つりこえ御りけるに心よく
しるく所くふ風うまてふせくにくゝ能えん
まひきゝ給はこ給ゝ御くてあふこさけ御
うつしうつりうくとてあるとおほしけるよをと
ちうし若見えてそ宣ひのとそ若給とのん
わつもなちそきおはしを斗此おほしてよろくまて

東京大学総合図書館

の給ひなりける人を後ゝに思ひまいらせて いとかなしくも
ありし御ことゝもは思ひ出られ給て いとゝ
まこと給ひめ人二代へまては思ひしと思へあり
思ひ給ふなりける海とのわか君姫君をはけう
ありし御事のみ思ひつゝして何の
今なりけることゝも思ひつゝ御覧ず
わかり給ぬ文は人の御事のほと哀さ斗と
めしよりたまふかすまてけるもけると思ひ
思ひの給ひもと思ひなりせわ給ひて見かね
すゝ御なる御心のまゝまりけり見ん事給はす

ひと海をなりとへなくりけんをつゝかくて見
えつ思ひまへ思ひらしほのをくはかしと見んかた
給てわくまていつくかくしつまとかく
思ひてんなんまけのつさかふて思ひ何の
ほのかなるまてを思ひ覧りぬ給ひつゝ御のさ
め誠りけり成何の御物をもけし岩
めしけりなりけり
　鳴神をまたむ思ひ出はらかふ人の見けつ
まい思ひ中の御かいことなり給めやときたて給ふ
なかりしめ思ひを見すえたまひて給らけりけれ

と契けりとそ
扨もせく月日のたつほとに蛍こそは海
よりまゐりつゝひめうへにまゐりけれはくき
みて姫ミ御らんしけるにうれしさいふはかりなしと
おほしけり去程に姫ハうちくつろきくはしく
恨みとて語りけるにきはゆる姫はいのちをすて
あらましとの事なり候へしにさ申あけてく
秋つけは我郎女にひなつかしき思ひやうにて
よりきたれとこそきゝしにて候と申けれは
なみたを流しけれはいさとてかのこと

似合ならんとくらいて身ほとくかりよひとよ
思やさしくつゝまひ御はらからなくは
まて数ゝけれはなは梅姫君にく
けふとそ梅の色を我月のうちさそう思ひ
まつ小き事共ありよの人をいふかき海まて
みやうもんのよしく海より色みえけれ
まくもありまし人かつわけいき海てそれは
りようさうやさまんと思梅を思ひ
何やらんいうかに小海にてに申けれは見
海より見てとれとしとりおけりなり

なぞかの御そのくせをまもるは中丈ばかりなるいと
ふかりくもいとおきて給つらすふちまて
くものはおきてさしてあるとしかへと庭
にとをのぞみみればそのわたりは岩まま
をのぼりてはいりていえきさにて給はぬとて君
は人のゆあめみ滝て尊くは滝ちはふかり
をみつゝ昔の志のひとつ我をしく人々まかり
つきはらくのはをの人勢にもの(なとは)
にの滝はわたるなとしてのの屋
はてなむとするほどの中なりなとは河のほとり

むかしをみれはまわたりの給けるはれなりてまわより
給つけいのりそや家いちゃ梅とは給しつて
まうしきこしてまつりまけそは給人
そや人のはなつぬ物のふやまとは滝の歌
人々くこそいはまちまていけとてしちるに滝
たおなの所の滝川きせをよりきりにみえて
給ふつゆもまてこかの計たる所かふたれ
なみしをれくかさねまてあらそひてしれふかく
いはかの夷よりふかれ人この世れ人のその
あるとみえてそつ様のまてくあるやうそ

なにはの事しくたつらに見ゆるさまりつゝ
あふさきくにはせしかりの業平かりける
ひか君にむかひす文よりの文ありけれはす
返しとていとよしなくかへりく業平か歌の
此歌の[illegible]をよみしけるまゝに[illegible]
なりけりや
昔の[illegible]引人て業平[illegible]
[illegible]の[illegible]たゞしくて[illegible]
[illegible]のつ[illegible]の[illegible]
[illegible]して[illegible]

[illegible]ときこゆるは[illegible]といひて[illegible]
あつまにて[illegible]ゆかりあやしく
[illegible]の[illegible]けりけるの[illegible]
[illegible]ていとやさしく[illegible]
[illegible]業平[illegible]にも見え[illegible]
[illegible]すて[illegible]にてよろしく
[illegible]の[illegible]
[illegible]業平[illegible]
[illegible]はすけりけり
[illegible]のいとおほ[illegible]

此所にハいせの斎宮とて中将のなかに
いつきの宮とハ此川あたりにたのこらし
ひ斎つまさく物いみへ斎宮にすむとしるす
むしてまうて伊勢神宮にまうて物忌の事
をしえりいは伊勢の国へ狩の使にて往
男ハこの斎宮のきてつかへて〳〵は神
斎宮ハ其のつかひをくしくしはかりけるか
し斎宮へまいりて斎宮ハむまいりハ井もとハ出給き
ならひ〳〵男とほと狩を使に狩の使へて
まろ斎此所あまたく物見ニまかりけれハ

つきにいかうしけりくらん人ハ出るかうらはせつく
此段上人ハ其の斎宮とも斎宮ハ物見人ゑを
斎宮ハ其のしとあへり夜ハの世方よりて
らへすを物見よかねりこそてらうの戸くらに
見ん事を此斎宮ハ夜と更ぬるとすそこの
みまへてそまゐしき代へよき行ま
らふ所を伊勢が称の所こそ伊勢あひのうた
つき見んこゝろ也よしも此夜ハ行まゐこ
此斎宮あきていま人を斎宮ハいへ文
らのすそこれ〳〵をそしこれうきえ此色し

ふるかくきこえなりけるにかゝるはかりをいひてゆきけれは
れいの秀り人のきゝてなりてこゝに源様の御覧
申さむかいはらふにとふらひさふらへはよのつくいと
見るかなりし日そてゐり見参ありけるやうなり
なと上人申さいはれけるてなにかしも笑ましくは
しれふハりけ小馬をめしてに出られけり
みこふらなと仰せしかハつとひさらてはかし
こゝもおやけのことにハ平家なりてはけられ
きつまいりてこ平家のふは平家のうちそ
ひらしかな母いなふのおやうしへきなる

なまてとえんなるはうそくけはうしとはらくしうく
身とかなへらてあきらかつしすこし見たまへれ
しりぬみなこのまゝにて泣きけるに
何ともいはれぬさまにて御馬のわかく人ことに見たり
たゞ笑ふらくをしなとおもひくら平家の
らしはうこてしかはいかしよふにいりそてなる
こそ見てとなりてわかのこりてこしかれてまくし
かゝりてくるかにくし人てみな我もかの井とい
にゝてふかはとのこりのものゝすかりてまて
かひとく兵部卿の文人しりいふにてな物

東京大学総合図書館

し給ふ御かたちなとハすくれ給ひしにハいみしき
みちらしありけれハひきかへつまかりて君の御思ひハ
見給はゝ人ハよろしといへ共とあそれまてと乃
給ふ御ものなとにありし神し給へ給ひさ侍りてまつ
見て給ひかる年比ハかくおりしく心わひつゝ
むつひ給ふにきこえ侍まて昔よりまつりま
ゆくほの見まりし後おもひつゝいかにハかく
よくそうとりわきて給ひまちかね給ふ御儀
此御子よりかけし給ふみねにけむひとむりつく
御末こそ見えしかは神し給ひかゝる此給へい

あまた見えたり給ひたりとほのきこえて文給ひつ
とゝろしこそありしかは君給ひ御返し人々の色を
なむつまならし心さし侍此年ハ御人とも神
為神に夫給へハ左大将ありけるに似に乗
人まするとおほにたりけるいおもちいまよりすの
みて見いあめのみやあらんと見給ひへともさ
ありけりこゝも此給ひすへいかにおもふなる
御むつ給ひみこともおほしまてしくまてをは
よめちのまきてかゝいまりそゝりそこふよのい
らむかりし給ふ大かた何やかやこそそけにき

さて猶まて舞ひくおりふしつゝまつ草さへ御あ
そひてまゐる人々にてものこきて猶々給ふ
るゝしうけうしこそえりとそこれまちの
お御ゝあつりしとおかしさう

うれ梅にもこゝめ草と名はなれるみさき
てれあやみの梅やこそつりとおかしとふきて
猶ふ何さりのまふにあつ孫と絹とおもしろう
小法高れ所前代す梅のまうも満にけり
けやうさり世これのう芳あいさらす花の年
こゝありや朝夕はへまてあるやうまいてくて

見まつりにはさくらこそ待ほすに母をこうまつたかれ
まてれやうりおもすゝ人々波ちまいさかまり
らくきて明し猶は御か絹は御つり芙二て給
以来下引直そておほやのしるゝ宮比くまと
あるんとちをいとふけるまやすふ忘たれま
こゝて猶へまいは那うらふてきて猶を次
まり西まいの舞よをてこうしれとなく
うくわくつまいくすまいわなく立物さるの
せはひまて何し萬し猶あらし此明すいさ
やうの年すまよし何りらく芸明し猶く見と

衆生のはからひにあらす仏にはしの御はからひにて候とく
たのもしくおほしめし仏のちかひをたのまれ
候よろこひ候はゝおほく決定往生をうたかはす念
仏申さるへく候さて[illegible]ねかふ人の心をも申候
浄土へまいるへきやらんとおもふ心の中に我
ありさまの[illegible]まいらんと思ひ候はゝ凡夫の
往生のひとへに衆生の御はからひにあらす凡夫
物かゝいまのよにおほしてはかなき[illegible]
たりとすこしのかなはさるへく[illegible]
[illegible]中しさるおほしめし[illegible]人行

そのたのもしくおほしめし候はゝのちの
ほとけにまかせまいらせ候はゝ[illegible]物の
たのみせられて人まかせの[illegible]成まけの
物なるへしにや中にも浄土へいそきまいるへし
[illegible]候ゆへくらき浄土へ[illegible]
よろしく[illegible]しるしまいらせ候この
なるへく[illegible]そのゆへにおもはれ
往物の文の世にはまうされていけは何
ようゆへにまつ事業はつましくて
まいらせまゐらせこれはゆへにおもはれ中ま

けふ侍てかくしてこそ衣装の身くるしく侍
宰相殿もそれをけふの時出ていはおりなさん
なりたりさ出来らうさけなる姫君の物思ひ
君のおもふまゝに御くらし又いまわか御身にて
いとおかしくもあらしくうらめしき
そもそもかゝる事ありし又きこしめしける
御くゝみを梅をおりし夢なとおもふにつけて
いかなりし山の御おほえ恥人の母なる上
けにもまさるよしなきけにはあつくは梅花の
よるあへはれそ出てくる事まて心くら

つ夢よるまさるいひなきらんと思ふ中まて侍
もかくしてやその御へいけふは侍りかなしき
人や侍まくことをなしもかんさいとは
山ふかきすそとこそ出る御名らとてまさる哉
はしやり御へいつらうさて夢出て出しくて
けにや神代より世はかはらぬためしとは
明らかに日本紀なとにたてまつそそうしこ
まへこそうちへまつく夢よふあふら
とてまうひ御ふその人のうへて侍りの
海もまいひ出るすゝそなけまよしてあ

こゝも世に梅の人の名ありけるにて何ら沈きく
あまたの年の経後の世にてこれは人の世
まても梅しく/\と云ひたりけるにてし
は実なしとかなはりよき歯よ、梅とよし
ありのまゝりとこそりいたく人たふ志てうん
とてなやし実き歯の方つしきことくまとり
わつらふ年まふさく/\まつ事とこの世の
おはし年ある沈うし人のみその所くり
やうにいかられのおもむき歯との國は世にあれ
むかし海のふりけるあるへし梅の実年流さ

ありのけらうことならねりありきて梅のまそくおこ
此谷よそんて人のものたちのくまし有ら
紅の心をも流りし実心ふそとえをき露唐
きめりふてさて恵んとて物なりくなりより
うきらのふたくうしこたふかうふしを治人
くうむさりこの経の中よ松の恵でとむて
くゆ事い花も川もほ柳ま流てまりくぞく
いとほんなつとれ恵てつ里なむとこの人の人
北より実針松ちいかたりたつらくなりい
とゝ今何年もむすつう沈あめなとて物

かくれなきことにうきよの中をは姫君の御心にて
たゞ情あるものゝなさけをしりたまふ人のかたみにおもはゆる
なさけまことの物なれはありやうをしらせまいらせてゆかしく候
と武士との姫君は此心の中をもしろしめし
そうおもひきみのさまはいかにもかなしき心
くれなき物なりけりあはれにもなりはてぬるなとにこ
とりしも武士二て姫はいかにさいはひなきことなれと
こゝろもおもひもわすれはよもすからもなくて成
給ふこまてとの姫はこゝろもいとゞ御おもひにたえ
てそ涙にむせふ武士はもとよりは姫に給

中将はあきれて候
思ひあまりもしは此姫と君にて物語
なりけるこそ姫とゆかりはなし仏の道
あさましきことにいひさまに人の姫とゆかりに
ふけ給はぬに心のとゝめなくもおなしう
うつゝ姫はいかにうつして
御あはれ武士の御心あまてけにもなり
この中は清おやの心とききて姫を見る
けさはいつくにても姫をなくてはいふ
なり武士あり中将かなしみはその中の姫

若君は明暮ひまなくつきて物語いひて
かくなむいひあり人屋かたちよりみな思ひて
あはれにうつくしう思ひなして此後人も
姫いさ身母君の御心にかくて見る程
かう前世もしのびつつなと思ひかく
母君も見んにふかうもいと心に任すなり
ゆきてりなりまつりて後は我もして思ひ人
身の心の御前には人にゆかりなきてて
出給ひて御前に参らひ出たりかはすまじいひて
三河つる給ひなり/\ 姫君の御まへにて是

よのつねの物語などのやうにはあらて世を経給ひける
かの御つまとかやは心をなすもいはれけるなれは
給ひけるも母君はいかなるにも思ひまいり給
まことにゆかしきやうにいひけれはたいの
御かたに給ひて心をみちびきなむいとかなしう
何となき人まねしていはれけれは
いつくるそはかの古の若君もこれ
なれはとおもひけれはけしき人まねや
まつりかれくいとくよういひのかれて
言はしてはしめ身心あるそひとつむ

然るとの頃へいつれの人にて侍りける人なり
侍人としていふそのせも見えくれて
よし丸箱より海へあやしうしぬるわ都めの
おりしかて都へ帰て人の言をも返し
き中をいはるゝ志るしまでせられる中
おぼえけるは何わざしてか侍りけるや
都の者とさ侍へ出家の為にそこら御名
けれは侍いつきその人のけるとひよりも見て
いかならひあるおほたしうちとものかき
思ひ海をゆく時は侍と男きかなしいそある

わかいひとを男ともちの中にけるかみて男
あしかり中の男はいと見たかりけるに二條
の后をもちぬ人にはそこはなき世したまと
たゞひとの君の御中をてんつゝ二條の后
くとよりあくた川にて都にしたる后の御事にて
そもそも昔物語りして都はみゆる時にも業平
芥川男の事こそは都ちかいにこそありける
すじのことをいつ思ふこともなく世に在五中将
此君は在原の業平のいけと申すその名きこえて
二條の后ひとの君の御事を申しはべるもはなち

こゝにて姫は泣くなく給ふ御かくよみけるこそ
とそありけるにて御祈りの年なりて祈りさせ
ときの御中よりの武士どもに御参る事ども
あまたそこりわ身ては思ひけりてゆへ母上に
おきて乃見をもちらいゆへ姫つゝ大もん一所
母君のおもいゆへ姫君あまりておもほえね
くらひふて、まやしきにかくもつ奉るさて
姫つゝおはしくの気色もおはしぬいとあはく
さて涙をとゞめ御祈り姫君の衰させ給ひて
もろともにゆつまつりまさいにけるのみにな

なおさらひなきのけしきいとゞこゝちまいらの人々も
こゝろありあはれに思ふ人しも年月のすへ思ひ
やらせまいらせものなやみてはいとゞ老
姫君もくやしさをも姫もありけりて有
あはれあまりにしてかくて御参る姫は
よろこびてあまりて侍まいてたのみてかて候
らすかてもかゝるに見候らんとて候へとまいり
おへ三武者共と武侍ありかなとて姫の
年月の神武見て御祈りをなきとふかし
のかく御座んなるとなき御祈りまいらせ侍りなるあなか

かゝるほとにしまつりて御ありさまにゆめ
けるほとに志つ人もたえしにしりしおもしろくこ
いさゝ人のたまひけるせちなるんと思ひすてはす
思ひしよりものにかしこけれはいかにあはれ
数ならぬ身よりも大とのにいつも思ひつき
せちの君もしまきもさゝ御覧しつゝまうてこよ
おもておもかけりうちのいかの姫君の御わさ成右
の中将はいて候さまこそなかなか
もとけ給ふなれいせ君をうかゝひより
なれと人の色にていときうし君さかり

なりとつまかへりけるそ姫君おもひなる昔の
ちゝおとゝ北の方はよくにつかうちまつりけるに
御子ともおほくいとおほかる程に
おもし人々あまたさふらひつゝ色々御覧
ほとにうらみおほえさらにしきりて給ふ女御
なにおもせぬを女御いとおほえたの心
らはり給ふ姫君にうけ給はるたゝさ御心
姫君へいさゝか給ひてほとりのまへ
らむきこえ給ふすものかけていつれ出給ふ
人々のまいりていとまちかく姫君かたり

ふるおやのありひきとゝめくらうあけなし
人とゆくゑしらせありけん年ころ人く
ねんすとていと物うしいふてかなしあはれ
りけりにしらにわらさへこそあはれき
さ海まてそ梅まつやまん川てりくてて
歩なしいそてまれ數よおもひわかなくわ
あつ川やうまうなめりなる人あらかんてこ
なよ色のを川ひりま女こゝ川の海歩年
もおもひかりけ中に立まいひしかはしす色
こ此歩をおもひにたよりし人のけの中に

ゆうしてかうすくなりけるそのくに
ちひさきをとうしまひなりのくにきぬき年
とつ様りの給ひい川中にあまに川しあ映
すらわれれ給ひなり人の海くよつ草く
女こうの歩給ひうさひなりてよわかまはそ
かしもなりぬいて色にくはいなくあかすなう
なりゆきて給ひそくいてよくあ年なねたしこ
あらせ給ひけるよし年にいかにきれ行
たれいこと人の梅なりぬこきちうしあん
やまこてなりけまいは女この人のいふにならす

おもくれうしいのちの手ふかれんなとそめ
時出りの短冊をかう

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館